

難 治 疾 患 研 究 所 創 立 5 0 周 年 に 寄 せ て



東京医科歯科大学難治疾患研究所は、「難治疾患」という名称を掲げる唯一の国立大学附置研究所として1973年9月に設置され、本年2023年、創立50周年の記念すべき節目を迎えることとなりました。

難治疾患研究所は、「難治疾患の学理と応用」を目的として医学部附属の7つの研究施設の統合・再編成によって設立され、疫学、聴覚機能疾患、機能病理学、神経生理学、中毒化学、人類遺伝学、応用人類学、犯罪精神医学、異常代謝、実験薬理学、超微構造、遺伝生化学、細胞遺伝、循環器病、臨床薬理学、病態生化学、内分泌異常の17研究部門体制で発足しました。

ちょうどその頃、1976年、当時本学医学科の学生だった私は、基礎配属実習で、短期間でしたが、駿河台地区の病態生化学分野で親身の研究指導を受けました。実験では、酵素を、その活性を維持したまま抽出精製することがいかに難しいかを体験することとなりました。その記憶は、最初の研究体験として今も心に刻まれています。

その後、本研究所は、社会の要請に応えるため幾度となく組織再編を繰り返し、現在は未来生命科学研究部門、病態制御科学研究部門、バイオデータ科学研究部門の3大部門を構成する21分野、およびジョイントリサーチ部門、連携研究部門、新型コロナウイルス研究プロジェクト推進室、若手研究者育成推進室、難病基盤・応用研究プロジェクト室、大学院教育研究支援実験施設、高深度研究技術開発クラスターからなる研究所となり、全国的に見ても大規模な研究所と

なりました。

本学では、難治疾患を「病因あるいは病態が明らかにされていないために未だ有効な診断法、治療法や予防法が確立されていない病気」と定義し、普遍性を維持しつつも絶えず変化する時代のニーズに合わせて柔軟に対応できる研究体制を構築し、新しい研究技術、生物学的知見をすばやく取り込むことにより、基礎医学領域の最前線で活躍をしまいいりました。この50年間を振り返り、本研究所が社会の要請や学問的潮流に応じて難治疾患の克服・解明という大きな課題に挑み、多くの成果を上げてきたことを、大変、誇らしく感じております。

本研究所は、多様で学際的な学問領域を背景とするトップレベルの研究者が集い独自の研究を進めています。2010年度から第1期の全国共同利用・共同研究拠点「難治疾患共同研究拠点（単独）」に認定され、これまでに蓄積した研究試料、多彩な研究手法、多元的情報の集積を活用し、優れた研究成果が上がっていることなどが高く評価され、第3期となる2027年まで拠点活動の継続が認定されています。また、2016年度から全国共同利用・共同研究拠点である九州大学生体防御医学研究所、徳島大学先端酵素学研究所及び熊本大学発生医学研究所と連携し、ゲノムから代謝物に至る生体分子情報を横断的に理解するオミクス研究を実現するため「トランスオミクス医学研究拠点ネットワーク形成事業」を推進し、2022年度から本事業の後継として、従来のオミクス研究をさらに進化させ、生命現象の本質を理解し、疾患発症のメカニ

ズムに迫るため「高深度オミクス医学研究拠点ネットワーク形成事業」を開始しました。

2022年度から指定国立大学に認定され、「世代を超えた地球・人類のトータルヘルスケアを実現する」という目標に向かうなかで、難治疾患研究と先導的生命科学研究の融合領域研究の推進役として、本研究所がその持てる力を十分に発揮し、中心的な役割を果たしてくれることを期待してやみません。

また、2024年度の東京工業大学との統合を進めています。これまで我が国に存在しなかった「世界最高水準」の研究大学になるため「コンバージェンス・サイエンス、変わり続ける大学、自由でフラットな文化」という方針のもと多様な才能が共に研究に専念するオープンな研究環境を目指しています。50年という長い歴史の中で全国にも珍しい“難治疾患”に特化した研究を続けてきた本研究所は、東京工業大学と統合した後も、学内の各部署や東京工業大学の関連部署との連携を通じて、多様な才能が切磋琢磨することで必ずや重要な成果を上げて、人々の幸福に貢献していくものと確信しております。

結びに、50年にわたる歴史を支えてくださった数多くの研究者、職員、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。変わらぬご支援をお願い申し上げます。

東京医科歯科大学 学長
田中 雄二郎
Yujiro Tanaka

医学博士。1980年東京医科歯科大学医学部卒業、1985年同大学大学院医学研究科博士課程修了後、同大学医学部附属病院第二内科医員。1986年米国マウントサイナイ大学附属アルコール研究治療センターリサーチフェロー。1991年東京医科歯科大学医学部附属病院第二内科助手等を経て、2001年同大学医学部附属病院総合診療部教授に就任。2006年同大学大学院医歯学総合研究科臨床医学教育開発学分野教授に配置換。同大学学長特別補佐、医学部附属病院病院長、理事・副学長、2020年4月より学長に就任。専門は医学教育、消化器内科学。



難治疾患研究所長

仁科 博史

Hiroshi Nishina

東京医科歯科大学難治疾患研究所は1973（昭和48）年9月に設置され、本年2023年、組織の誕生から50周年を迎えます。「難治疾患研究所」の伝統と多くの実績を築いてこられた諸先輩方、そして陰になり日向になり支えてくださった多くの皆様に、心より感謝の意を表したいと思います。

2022年4月、難治疾患研究所は、未来生命科学、病態制御科学、バイオデータ科学の3部門21分野を中核にした研究組織に改変されました。全国の33国立大学法人に設置された医学・生物学系附置研究所・センターの中でも五指に入る大きな組織です。本研究所は、2010年度から第1期の全国共同利用・共同研究拠点「難治疾患共同研究拠点（単独）」に認定され、現在、第3期目（2022～2027年度）が進行中です。第2期期末評価では、「多彩な研究手法を用いた先駆的な研究を推進する中核拠点として優れた研究成果が上がっている」と、また「研究対象としての難治疾患の時代に応じた変容に柔軟に対応できるよう、異分野を含む国内外の研究者のハブとしての機能強化を推進し、旧来の研究領域にとらわれない持続的で発展的な変化に対応している」と高い評価を得ました。国内外から感染症対策や少子高齢化対策など多様な人類の健康増進に資す

る課題の解決が求められている現在、新たな視点の基礎研究、そして応用研究が求められています。

難治疾患研究所は、大幅な世代交代の時期を迎えています。先の見えにくい時代に対応するのみならず、一歩も二歩も時代を先取りするためには、優秀な人材の獲得と育成が必須です。2019年から2023年にかけて8名の教授が赴任しました。現在も3名の教授選考が進行中です。

また、本学は1年後の2024年10月に東京工業大学と統合し、これまで我が国に存在しなかった「世界最高水準」の大学になることを目指しています。「コンバージェンス・サイエンスを生み出す医工連携、自由でフラットな世界標準の文化、変わり続ける大学」という理念のもとで、医学部、歯学部、教養部、生体材料工学研究所、大学病院など学内の様々な部局と連携するとともに、文化の異なる東京工業大学の各部局との連携も必要となります。

難治疾患研究所はこれまで以上に高い目標を掲げ、実行能力のある個々人からなる組織を目指し、新たな時代への区切りとして、50周年を迎えたいと思います。国内外の多くの皆様に注目され尊敬される難治疾患研究所となれるよう、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

1985年東京大学理学部生物化学科卒業、1990年東京大学大学院理学研究科修了、東京工業大学生命理工学部助手、1995年トロント大学オンタリオ癌研究所博士研究員、1997年東京大学薬学部助手、1998年東京大学薬学部助教授、2005年東京医科歯科大学難治疾患研究所教授、2020年から現職。



医学部長

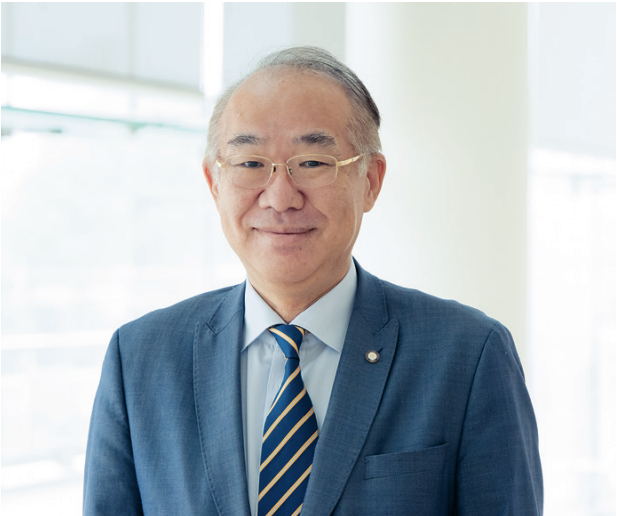
東田 修二

Shuji Tobda

難治疾患研究所は、そのミッションが難治疾患に関する基礎から応用までの研究活動による疾患の克服であり、その設立が1973（昭和48）年の医学部附属の7研究施設の統合によることから、医学部とは密接なつながりがあります。研究活動にとどまらず、現在は医学科2年次の基礎医学系科目の授業、2年次以降の研究実践プログラム、4年次のプロジェクトセメスター（研究室配属）など、医学部学生教育にもご尽力いただき、医学部長として感謝しております。また、大学院医歯学総合研究科を構成する分野として大学院生の指導にも共に取り組んでおり、最先端の実験手法や研究アイデアを有する難研教員やスタッフの存在を心強く感じています。個人的にも私が学部生の時、当時、駿河台地区にあった臨床薬理学教室で夜遅くまで実験に参加させていただきました。最近では、私が属する病院検査部からのSARS-CoV-2変異株に関する4編の論文に、共著者として難研の先生方にご協力いただきました。

2024年秋に本学は東京科学大学となる予定で、各部局の新大学における在り方の再検討が求められます。一方、まずは御茶ノ水地区での難治疾患研究所と医学部とのより密な研究協力の体制が新大学の新たな展開に寄与すると考えます。

1984年東京医科歯科大学医学部卒業、第1内科医員、1990年トロント大学オンタリオ癌研究員、1994年東京医科歯科大学医学部助手、2015年同医歯学総合研究科教授、2022年から現職。



歯学部長

依田 哲也

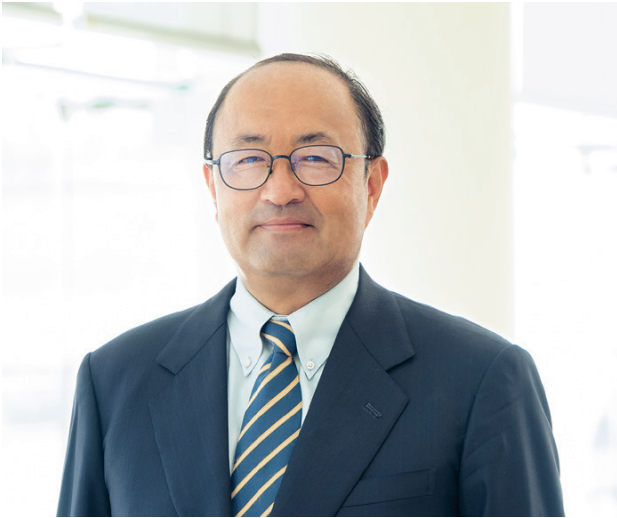
Tetsuya Yoda

難治疾患研究所創立50周年、誠におめでとうございます。歯学部および大学院医歯学総合研究科を代表して心よりお慶び申し上げますとともに、今日まで組織の発展のために積み重ねてこられた関係各位のご努力に対し深甚なる敬意を表します。

50年前の1973（昭和48）年創立当初は医学部の7研究施設が再編して17分野からスタートし、時代のニーズに敏感に対応した教授採用、分野の改変に積極的に取り組みながら、現在は3部門21分野の他、フロンティア・プロジェクト研究室、2客員部門を有する大きな研究所に発展されました。指定国立大学法人重点研究においても、「創生医学」「希少疾患・難治」の中心的存在であり、また、「口腔科学」研究においても大変ご尽力いただいております。今や本学の看板ともいべき研究所であります。また、研究のみならず、大学の機関として、田中学長の掲げる教教分離に則り、大学院はもとより学部学生の教育にも多大な貢献をいただいております、改めて感謝申し上げます。

今後は、東京工業大学との統合により大きな組織改編の波が来るかもしれませんが、「難治疾患共同研究拠点」は、新大学においても看板の一つとなるはずです。今後ますますのご発展を心より祈念申し上げます。

1985年東京医科歯科大学歯学部卒業。1991年同大学大学院修了。1994年ドイツ国ボン大学研究員、2001年東京大学医学部講師を経て2003年埼玉医科大学口腔外科学教授。2018年東京医科歯科大学大学院顎顔面外科学分野教授。2019年東京医科歯科大学理事・副学長。2020年から現職。



生体材料工学研究所長

影近 弘之

Hiroyuki Kagechika

難治疾患研究所が設立50周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

難治疾患研究所は、難治疾患の学理と応用を目的とした、ユニークな附置研究所であり、全国共同利用・共同研究拠点「難治疾患共同研究拠点」に認定され、難治疾患研究者コミュニティの発展に貢献してこられました。また、大学院教育にも力を注ぎ、生体材料工学研究所とともに大学院疾患生命科学研究所／生命情報科学教育部を設立し（2003年）、その理念は医歯学総合研究科生命理工医療科学専攻に受け継がれています。

私は、着任当時は研究部所属であり、多くの難治疾患研究所の先生方と交流する機会がありました。我が国のケミカルバイオロジー研究体制の構築の一翼を担い、大学間連携事業「学際生命科学東京コンソーシアム」を推進するなど、研究教育両面での意識の高さと熱意を感じておりました。本学は2024年に東京工業大学と統合しますが、改めて難治疾患研究所と生体材料工学研究所が連携を強化し、医歯工連携における研究成果の社会還元と人材育成を推進する機会になると考えております。一層の連携推進をお願いするとともに、難治疾患研究所のますますのご発展を祈念いたします。

1983年東京大学薬学部卒、1985年同大学院薬学系研究科退学後、助手、助教授を経て、2004年から東京医科歯科大学教授。大学院疾患生命科学研究所長・生命情報科学教育部長（2010-11年）、大学院医歯学総合研究科副研究科長（2012-21年）を経て、2020年から現職。



大学院医歯学総合研究科副研究科長

岸田 晶夫

Akio Kishida

難治疾患研究所が設立50周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。教職員の皆様、ならびに卒業生の皆様にも心よりお慶び申し上げます。

大学院医歯学総合研究科生命理工医療科学専攻の歴史は難治疾患研究所と生体材料工学研究所の協力により2003年に設置された大学院生命情報科学教育部に遡ります。生命情報科学教育部は附置研究所が主体となって教育を行う、全国でもユニークな大学院でした。2012年に医歯学総合研究科生命理工学系専攻（博士3年）と医歯理工学専攻（修士2年）に統合され、さらに2018年と2023年にそれぞれ検査学および口腔保健学の参加により現在の生命理工医療科学専攻（博士3年）と医歯理工保健学専攻（修士2年）の体制となりました。

これまでの20年間、難治疾患研究所の先生方には大学院の運営ならびに教育に関して多大な貢献をしていただきました。当専攻の教育の基軸である「サイエンス」の重要性を体现してください、優れた修士および博士を社会に送り出すことができました。これは東京工業大学との統合においても重要な基盤となります。生命理工医療科学専攻への変わらぬご支援をお願いするとともに今後のますますのご発展をお祈りいたします。

1983年京都大学工学部卒業、1988年京都大学大学院工学研究科退学、1989年工学博士、1992年鹿児島大学工学部助手～助教授、1999年国立循環器病センター研究所部長、2004年東京医科歯科大学生体材料工学研究所教授、2022年から現職。



大学院保健衛生学研究科長

福井 小紀子

Sakiko Fukui

難治疾患研究所が、記念すべき創立50周年を迎えられましたこと、心からお祝いとお喜びを申し上げます。

創立以来、“難治疾患”という名称を掲げる唯一の国立大学法人附置研究所として、研究所の先生方を中心に、基礎から応用まで幅広い最前線の研究活動を精力的に展開され、大きな功績を積み重ねてこられたことに、深い敬意を表します。

研究所の50年のご発展は、これまで築かれてきた伝統と、先生方をはじめとした教職員ならびに大学院生を含む構成員の皆様がたの並々ならぬ御尽力の成果と存じます。

当方は、2020年より本学保健衛生学研究科に赴任いたし、2022年より保健衛生学研究科長を拝命しておりますが、名立たる本学の難治疾患研究所のご功績を学外からも、学内においても見聞きしてまいりました。今後は、本学の一部局として、看護学ならびに検査技術学の立場から、半世紀にわたる研究所のさらなる発展に向けて、より一層の連携を持たせていただき、ご指導・ご鞭撻をいただきながら、大学一丸となって研究所の先生方とともに新たな成果の創出を目指していけたらと願います。

本学難治疾患研究所がさらなる飛躍を遂げられんことを祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

1993年東京大学医学部保健学科卒業、2000年東京大学大学院医学系研究科修了、2001年東京都立大学講師・准教授、2009年厚生労働省在宅看護専門官、2013年日本赤十字看護大学教授、2017年大阪大学教授、2020年東京医科歯科大学保健衛生学研究科教授、2022年から現職。